



～ 生きる・命を考える ～

校長 小木曾敏樹

6月11日(水)から13日(金)までの3日間、3年生は修学旅行に出かけます。1日目は広島、平和・命についてしっかりと夜まで、目いっぱい勉強し考えてもらいます。2日目は大阪、USJで夜まで目いっぱい楽しんでもらおう。3日目は大阪・京都、グループで協力し合ってちょっとした冒険を楽しんでもらおう。他の学校では行っていないだろう、ちょっとだけ変わった修学旅行に行ってきます。

バス代金やホテル代金が高騰し、修学旅行を一泊にする学校や廃止する学校も出てきています。広島・長崎まで行き平和学習をしようと思うと、どうしてもどこかでバスを利用しなくてはならず、外国人観光客の増加などもありホテル代が高くなります。広島へ行っていたのに、東京へと行先を変更する学校が多くなったそうです。東京へ行き、職業体験をし、職業講話を聞くというプランだそうです。

苗木中学校は、広島を外す予定は今のところありません。どんな学習よりも大切なことだと考えるからです。平和学習と言っていますが、私は、「命の学習」、「生きることの学習」と捉えています。人の命や人権の尊厳、自分自身が生きていくことの意味、そんな人間の生の根幹に関わる学習だと思っています。

原爆資料館では、リアルな画像や映像もあり、気分が悪くなってしまう人もいるかもしれませんが、80年近く前に日本で起きた現実であり、未来に起こりうる現実なのです。だから、しっかり見て、しっかり読んで、しっかり感じ、しっかり学んでほしい。

夜は、語り部の方からのお話を聞き、1日の学習について学級活動、意見交流を行います。そして、ホテルから歩いて平和公園まで行き、人通りも少なくなった静かな慰霊碑でセレモニーを行い、多くの人たちが水を求めて死んでいった元安川を挟んで、平和公園の川岸から原爆ドームに向かって2曲合唱し、夜のセレモニーを終わります。他校の生徒はお風呂に入って眠る前の自由時間、もしくは班長会、部屋長会、リーダー会などを行っている時間ですが、苗木中は活動を続けます。

私が皆さんに感じてほしいと思っているのは、生きたくても生きられなかった人たちの「命」の重みです。突然奪われた平凡な日常が、いかに幸せであり、生きることを許されなかった人々にとって、それがいかに大切な日々であったのか。それを今の自分に重ねてみてほしい。私の命が突然奪われたなら。家族の命が突然奪われたなら。生きることを許されなかった人々の、普通に死んでいくことさえも許されなかった人々の無念を、自分に重ねてみてほしい。自分の命は、自分だけのものではない。「軽々しく、死ぬ、死ぬ、殺すなんて言うものではない。」そう、21万人の命があなたに語り掛けてくるはずです。(広島と長崎を合わせると約21万人)

大阪での研修は、しっかりと楽しめばいい。修学旅行生などいなくなった夜のUSJを満喫し、一生の思い出に残るそんな楽しい1日間にすればいい。



しかし、広島市の平和公園に入った瞬間から、ホテルの研修室に入った瞬間から、楽しいモードのスイッチを完全にOFFにして、あなたの心の、感性スイッチを完全にONにしてほしい。その目で過去の事実を、過去の命をしっかりと見届け、心をしっかりと働かせあなたの感性で感じてほしい。自分らしく生きたかったという命の声を受け止めてほしい。夢を見たかった、夢を追いかけたかったと80年間さまよっている若い命の声に、あなたの分もしっかり生きるね、夢を追いかけてみるよと、応えてほしい。それが、「命の学習」、「生きることの学習」です。

他校ではやらない学習をする。だから、他校ではやらない楽しさもつくる。そして、他校ではやらないプチ冒険の旅もする。その一つ一つを充実したものにしてほしい。

「命」と、向き合った瞬間

今から20数年前、みんなのお父さんお母さん世代の修学旅行の話です。

平和学習で、特攻隊のことを調べていた女子生徒がいた。飛行機に爆弾を積み敵の船に突っ込んでいく特攻隊、人間1人が乗れるだけの魚雷に爆弾を詰め込み敵の船に突っ込んでいく人間魚雷、若い命を犠牲にしてこの世を去っていった数千人の若者たち、その最後の言葉である「遺書」を彼女は調べていた。

修学旅行で広島にある江田島の旧海軍資料館を訪れた時、彼女は壁に飾られていたある1枚の写真を見て、その場にしゃがみ込み、号泣してしまった。その写真は、自分が調べたいくつもの遺書の中にあつた一人の青年の写真だった。過去の事実として調べていたことが、その人の遺影を見た瞬間、時が戻ったかのように同じ時になり、青年の死が現実のこととして、彼女の心に語り掛けてきたのだろう。どうした？大丈夫か？と聞くと、「だって、あの遺書の人が・・・、悲しくて・・・」と言ったように思う。過呼吸のように泣きじゃくる彼女。しかし、見学を止めようとはしない。嗚咽しながら次々と進んでいこうとする。命と向き合った瞬間。彼女の修学旅行がここにあった。

長崎への修学旅行を初めて行った時の話です。生徒たちが自分で選択して学べるように、いくつもの見学場所や何人もの講話、体験などを準備した。みんな同じではない。自分が学びたいことを選べる修学旅行にした。準備のために、自分のお金で何回も長崎に行った。

しかし、あるクラスの男子生徒2人は、このプランにのってこなかった。彼らが言ったのは、これも所詮、先生たちが準備したもの。自分たちは自分たちで探してみたい。2日間、長崎のあちこちを探して、被爆者の方と巡り合い、直接話を聞きたい。グループではなく2人、準備したプランは一つも行わない・・・。OKを出した。ただし、定期的に連絡を取ることにした。実際には、この2人のことを教員が遠くから追いかけていた。

「すみません。被爆者の方ではありませんか？」「失礼なことを言うな。なんて奴だ!!」

道行く人に声をかけるも、ことごとく無視されるか、怒鳴られるかで、2人は心が折れかかっていたようだ。他の生徒たちは、学習もするが、みやげ物を見たり、中華街でご飯を食べたり、観光もした。そんな中、この2人はひたすら被爆者との出会いを求めて歩いた。2日間で2~3人の被爆者の方と巡り合えたようだ。

最後に巡り合った老人は、長崎の路面電車の電停（駅）。「僕たちは岐阜県から修学旅行で来ました。被爆者の方から直接話が聞きたくて・・・」と話しかけた。老人は、次の電車が来るまでの間だけなら、と被爆体験を話してくれたようだ。これを遠くから見守っていた教員は、カメラの望遠レンズで二人の様子を見ていると、この2人が泣いているように見えたようだ。電車が来て通り過ぎ、次の電車が来て、また通り過ぎ、何本かの電車を見送ったようだ。この2人の涙は、カメラのレンズ越しでもはっきりと分かった。この老人は、これまで被爆体験を誰にも話したことはなく、家族にも話したことがなかったという。忘れてしまいたい、消し去ってしまいたい記憶だからだ。それを、この2人との出会いが変えた。被爆して60年後、初めて話を聞いたのがこの2人だった。命と向き合った瞬間。この子たちの修学旅行がここにあった。

君たちが、命と真剣に向き合った瞬間、君たちの修学旅行の意味が生まれる。